

歴史の中の女たち

<第9回>

尼僧兵士カタリーナ

伊藤 滋子



スペインから新大陸へ渡るのは一攫千金を夢見る男たちばかりという時代に、たった一人で渡航し、インディアスを縦横無尽に駆けめぐった女性がいた。彼女の名はカタリーナ・デ・エラウソ、スペイン北部のサン・セバスティアンに生まれたバスク人である。2人の姉とともに4才の時から伯母が院長をしている修道院に預けられ、尼僧になるために育てられたので、女性は文盲が普通の当時としては高い教育を受けたといえる。ところが15才で修道女の誓願をたてる寸前に、同僚との諍いがもとで修道院から脱走する。1600年のことであった。女の一人旅など考

えられない時代のこと、以来男に扮して人生を過ごすのだが、自由に動き回るためにはそれしか方法がなかった。

修道院という世間から隔離された環境で育ち、はじめて外界の空気に晒されたカタリーナは、孤児と偽って人の同情をひき住み込みの使用人になったり、羊飼いの仲間に加わったり、あるいは馬子をしながらスペイン北部を転々とする。バリャドリッドでは宮廷の要人が彼女を同じバスク人と知り小姓として採用してくれ、将来の道が開けるかと思われたが、ある日主人の家に訪問客があり、扉を開けるとそこに立っていたのは父親だった。しかし父は幼い時に手放したうえに男装の彼女を見ても自分の娘だとは気づかず、主人に消息を絶った娘を探して欲しいと頼む。彼女がいた修道院は主人の一族が代々パトロンをつとめ、父はその縁を頼ってこの有力者に娘の搜索を頼みにきたのだった。しかし懐かしい父の胸に飛びこみたいとは思うものの、一旦自由を知った今、再び窮屈な修道女の生活に戻ることは耐えがたい。彼女はその夜のうちにそこを抜け出し、元の放浪生活に戻った。けんかで人を傷つけ、相手の傷が癒えるまで牢獄に繋がれるような無頼者の生活を送るうちに、当世の多くの若者と同じく、彼女の心にもインディアスに行きたいという願望が芽生える。それにそこならもう見つかる心配はないし、何もかもがずっと自由なはずだ。広

い世界を知りたい！文無しにとって最も手取り早い方法は船員になることだった。インディアスへの航路には古来から北の海で航海術に長けていたバスク人が多く働いていて、彼女は同郷の船長に頼み込んで見習い水夫に雇ってもらうことができた。

年に一度南米大陸へ向う艦隊は護衛の戦艦、商品を積み込んだ船、連絡用の小型快速船などからなり、海賊の襲撃に備えて常に集団で航海し、単独の航行は許されない。17才のカタリーナが最初に踏んだインディアスの地はベネズエラ東部のアラヤ半島だった。通常はもっと北のサント・ドミンゴを通るのだが、1602年の艦隊には、半島にある良質の塩田から塩を持ち運んでいくオランダ船を追ひ払う命令が下されていた。防衛の手薄な現地にはその戦力がなかったからだ。艦隊が半島に近づくと、折りしも沖合いには2隻の戦艦に護衛されたオランダ船数隻が停泊し、塩を採掘している最中であつた。スペイン艦隊が近づいてくるのを見たオランダ船は早々に作業を中止して逃げて行き、船に乗り遅れたもの数人が捕らえられた。

快速船は各港に艦隊の到着を報せるために隊を離れてここから先行した。艦隊は大陸の北部沿岸にある港に数日づつ停泊し、商人たちはスペインから運んできた品物売る。そして最終目的地、パナマのノンブレ・デ・ディオスで、ペルーやチリなどから運ばれてきた銀をはじめとする産品が積み込まれる。それらの品物は太平洋側の艦隊に守られてパナマに着き、そこからロバで地峡を横切り、カリブ海側に運ばれてきたものであつた。太平洋側でもカリブ・大西洋側でもイギリス、オランダ、フランスの海賊船の襲撃を受ける危険が常にあつたから、全く気の抜けない航海だった。

カタリーナはノンブレ・デ・ディオスで船

から遁走し、名前もアロンソ・ディアス・ラミレス・デ・グスマンと改め、太平洋岸のパナマ市へ渡り、ペルーの商人に雇われた。主人に従ってペルーへ行く途中、マンタ沖で船が難破し、奇跡的に命拾いするという災難に遭ったりしたが、商人の下で働くうちに商売にも慣れ、サニャの店を任されることになった。1542年にリマが建設されて半世紀、ペルーの内陸部にはもう昔のインカ道に沿って点々とスペイン人の町が築かれており、サニャもそんな町の一つだ。商人はすべてに鷹揚で、カタリーナも彼の信頼に応え、商売も順調で、このまま行けばまともな人生を送れたかもしれない。が、インディアスの荒々しい世情と彼女の持って生まれた激しい気性はそれを許さなかった。

ごく些細なことから始まったけんかでカタリーナは人を傷つけ、一旦は教会に逃げ込みながら役人に捕えられるという事件がおきる。遠くの町にいた主人が駆けつけて交渉してくれたお陰で牢から出されて教会に戻された。犯罪者といえども教会の中では捕らえられない、という慣習はローマ時代からの伝統であつた。しかし相手はどこまでも付きまといてきて、とうとう彼を殺してしまう。彼女が最初に犯した殺人であつた。カタリーナは主人の紹介状を持ってリマへ逃れ、別の商人の下で働き始めた。

リマは南米の首都で、扱う商品も高額で商売も大きい。じきに新しい主人の信頼を得たカタリーナはその家に住み込んで家族同様の扱いを受けるようになったが、思いがけないことが起こった。主人の妻の妹が彼女に恋をしたのだ。しかし女であるカタリーナはそれに応えることができない。追われるようにして商人の家を出ると、ちょうどチリに行く兵士を募集しているのに出くわし、その場で応募する。チリの状況は厳しく最前線は兵士の

墓場とまで言われておりこれには主人も驚き翻意を促したが、彼女の意思は固かった。

1604 年、19 才の彼女は大勢の兵士とともにリマから海路コンセプションへと運ばれた。チリの先住民にはインカやアステカのよう中央集権的なまとまりがなく、それが却って制圧を難しくして攻防が続き、この時新たに 2000 人の兵が投入されようとしていた。コンセプションに上陸して司令官の副官が隊員名簿を作成している時、彼女の番がきて、サン・セバスティアンの出身と名乗ると、副官は突然ペンを放り出して彼女を抱きしめ、バスク語で父母や兄弟、修道女になっているはずの姉妹たちの消息を聞きだそうと質問攻めにした。なんと彼はカタリーナが 2 才の時に別れた兄ミゲルだった。彼女は最後まで素性を明かさなかったが、兄は何くれとなく面倒を見てくれて、実の弟のように扱ってくれた。

最前線での彼女の戦いぶりは男に勝るとも劣らず、後に数々の上官から高い評価を得ている。敵を恐れず果敢に戦い、重傷を負ったこともあった。一人で敵を追いかけて奪われた軍旗を取り戻すという功績を挙げ、ついには士官にまで昇格する。しかし血の気の多さも敵を相手にしている間は良いのだが、兵士仲間の賭けトランプではいつも諍いを起こし、終にはけんかのあげく相手を殺してしまうことまであった。

本来なら死刑になるはずの彼女を救ったのは同胞のバスク人である。伝統的にバスク人は働き者で社会的に成功するものが多く、それが嫉妬を招き、往々にしてスペイン人との間に軋轢が生じた。それがまた結束を強め、バスク人同士で互いに助け合う慣わしがここインディアスでも生きていた。この後もカタリーナは幾度となく危機に陥ってはバスク人仲間に助けられる。しかしチリに来て 9 年後、

ついに悲劇が起こった。友人の決闘に加担し、暗闇の中で誰とも分からず刺し殺した相手が兄ミゲルだったのだ。常のごとく教会に逃げ込み、物陰から埋葬される兄を見送らなければならなかった彼女の胸も、この時ばかりは張り裂けそうであった。この一件のあと彼女は軍を脱走しコピアボまで北上したあと凍死の危険をおかしてアンデス山脈を越え、トゥクマンを経てポトシへと向う。

銀の町ポトシはスペインの富の源泉である。首都リマでさえ人口 2 万人というのに、13 万人の人口を擁す南米最大の町であった。徹底した消費社会で銀以外の品物はすべて外から運び込まれる。蜜にむらがる蟻のようにそこに引き寄せられてきた人々は世界中から集められた最高級品をまるで熱に浮かされたように食欲に消費した。食料などの日常生活用品は主にラ・プラタ地方から運ばれてくる。舞踊教室 14、賭博場 36、刺青師 700 人という数字を見ただけで、その特異さが分かって。ただし立派な建物や煉瓦造りの家は少なく、誰もがここを仮の住まいとしか考えず、腰を落ち着けようとしていないことは明らかだった。桁違いの華やかさの一方で、強制的に連れてこられ、鉱山で働かされている先住民の悲惨さは地獄さながらであった。

何のつてもなくポトシに着いたカタリーナはたまたま広場で出会ったバスク人商人に雇われたのを皮切りに、この先 7 年間アルト・ペルー、ペルーの各地を渡り歩き、実にさまざまな仕事に手を染めた。仲買人、役人の助手、用心棒、先住民征服隊への参加、刺客、集金人、裁判所の調査員、運搬業、兵士など、まるで当時流行していた悪漢小説の主人公そのもので、一つ一つのエピソードがまた、小説になるほど波乱万丈であった。リマで兵士になってオランダ船と戦うために船に乗り込んだが、その船が味方の誤射で沈められ、敵

船に救助されてペルー最北端の港パイタまで連れて行かれたこともあった。誤解を受けて夫から殺されそうになった婦人を救い、危険を侵しながら彼女の母親のいる修道院へ送り届けるといったエピソードは彼女の義侠心を物語る。チチカカ湖畔でチリにいた時の上官に出会い商人としての経験を買われて彼が組織する遠征隊の兵站の仕事任せられ、クスコ、ウアマンガ、ワンカベリカなどを行き来して、物品の補給、運搬用のロバや人足の手配をするのが最後に従事していた仕事であった。だが恒常的に暴力的な事件を引き起こしたり、巻き込まれたりして幾人の人を傷つけ、殺したことが・・・そのたびに教会に逃げ込んだり、同胞のバスク人に助けられてはうまく逃げおおせてきた。

しかし彼女のこのような放縦な生活もいよいよ大詰めを迎える時がきた。ウアマンガでのこと、いつものごとく揉め事を起こし、捕われかけたところを司教カルバハルに助けられる。高德の司教の慈悲にあふれる諫言はかたくななカタリーナの心を解きほぐし、彼女ははじめて自分の来し方をすべて包み隠さず告白した。あのハンサムで腕っ節の強い、戦場でも決闘でも勇猛なことで有名なアロンソ・デ・グスマンが女性で、しかも尼僧だったことが分かると、世間は驚愕し、噂はまたたく間に高原の町々に広まった。司教は本国へ彼女が実際に誓願を立てたのかどうかを問い合わせる手紙を送ると同時に、世間の好奇心から守るために彼女をウアマンガ唯一の女子修道院に入れ、できることなら修道女に戻そうとしたが、決して無理強いはず暖かく見守った。しかし5ヶ月後、突然司教が亡くなると、今度はリマの大司教が、好奇心からか親切心からかは定かではないが、保護者のなくなったカタリーナをリマの修道院に移し、副王の前でその半生を語らせたりして、

彼女は首都でも有名になった。ようやく2年半後、彼女は正式な修道女ではなかったという調査結果が本国から届く。晴れて修道院から解放されたカタリーナは元の男装に戻り、24年ぶりにスペインへ帰国した。このころ描かれた肖像画をみると美人というわけではないが、醜くはない。背が高く、黒髪を断髪にして常に剣を携え、人には大男の印象を与えた。ただ手だけが力強くはあるがふっくらとしていて、時おり女らしい動きを見せたという。

当時マドリッドに帰還していたチリ時代の上官たちは口を揃えて彼女の兵士としての有能さを讃え、戦場での働きに報ってやって頂きたいと嘆願したため、王室もそれを認めて士官の称号を許し、年金を下賜した。その後ローマへ行って法王に拝謁し、男装の許可があたえられる。すっかり有名人になった彼女は行く先々でもてはやされるが、やはりインディアスへの思いは断ち難く、1630年、今度はメキシコへ渡る。黒人を使ってベラクルスとメキシコ市の間の荷物を運搬する仕事を始め、1650年頃オリサバ付近でロバに囲まれて誰に看取られることもなく死んだといわれる。

(いとう・しげこ)